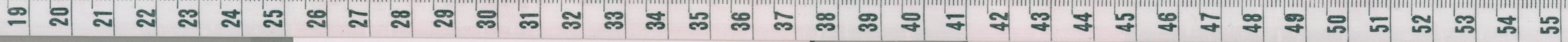
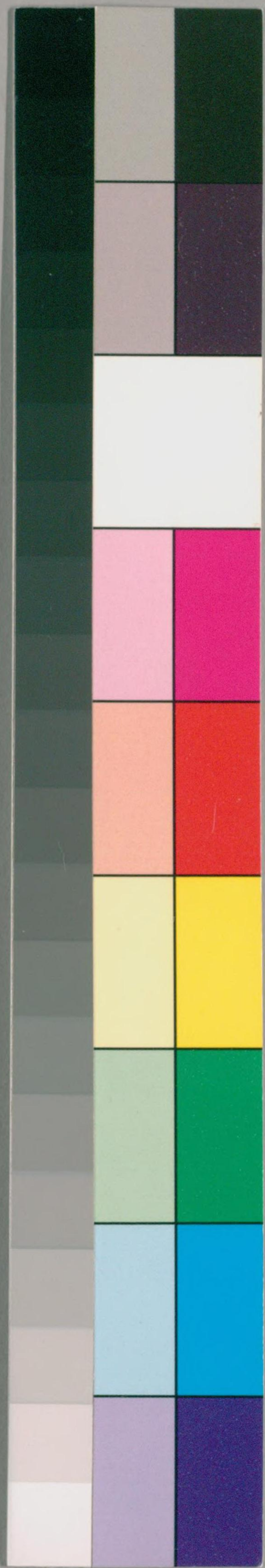


863

4



国立国会図書館 タイトル『皇國威談』 請求記号 863-4

ガラス使用



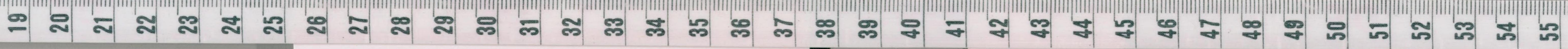
皇園威談

皇園威談

皇園威談

福庵藏書

布衣  
毛





皇國威談

千早振神代よ於我 皇大御國を豊葦原の

千秋長五百秋の水穂國と稱する所以也

天照大御神高天原北大御田に殖ま<sup>レ</sup>稲種之地

神不受持<sup>テ</sup>其作<sup>ル</sup>ん<sup>ト</sup>は<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>公民<sup>オホシメタカラ</sup>不教<sup>シ</sup>いた<sup>ス</sup>り

よ於千秋の長五百秋不八束の瑞穂<sup>ミツホ</sup>莫<sup>ナク</sup>は<sup>レ</sup>ゆ<sup>ル</sup>た

行<sup>ハ</sup>り<sup>テ</sup>故<sup>ニ</sup>天下に千萬國<sup>チマンクニ</sup>は<sup>レ</sup>我<sup>ニ</sup> <sup>オホヤマト</sup>大日本<sup>ニ</sup>

可並國も<sup>ハ</sup>れ<sup>テ</sup>可類<sup>カ</sup>稻種<sup>イネノタネ</sup>も<sup>ハ</sup>ん<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>テ</sup>は<sup>レ</sup>て<sup>モ</sup>其

瑞穂<sup>ミツホ</sup>と稱<sup>ス</sup>ふ<sup>ル</sup>珍敷<sup>ウツクシ</sup>義穂<sup>ヨシホ</sup>とい<sup>ふ</sup>は<sup>レ</sup>の<sup>意</sup>にて<sup>ハ</sup>別<sup>ニ</sup>稻

の<sup>一</sup>と<sup>ハ</sup>我<sup>ニ</sup>総<sup>ス</sup>い<sup>ふ</sup>は<sup>レ</sup>る<sup>ニ</sup>我<sup>ニ</sup>他<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>に<sup>ハ</sup>そ<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>稻<sup>ノ</sup>も<sup>ハ</sup>ら<sup>ズ</sup>ぬ





邦と河をまゝい作てり實かく偶取待てり味れき國  
もあつたり既支那なる水を多く入炊て後湯を  
まじり蒸て喰つる是我邦のやう炊てる飯なる  
はる所より別悪米の訛といひぬ

寛政年中徳奎國人ヲロシヤに漂着し俄ち歸りて  
妻子をもつてこの世へ死んとせしをきり又我國  
の漂流人彼國の屬鳩不着山なるをきりゆは  
るをきりてこの世へを漂船せし種し事し  
十語りては船中の米飯なるをきりて其妻人者  
かきて喰つるは或人云く漂流人子護送志來て

蝦夷のネモロといふ地を越年とてり  
こをわし餅を賜ふ味きを以て之喰はり  
とていふ土代國人あるが語りアメリカ國去上  
官の食物素因子にてパンといふは此の  
大皇國の米を欲せりとてり  
とてり全初生の小兒の爲不病行て調理を如く  
乳けの物行て人な生育せしむるは彼瑞穂の  
稲の水晶の如き米はなすて叶もきたや夫々平常の  
食物よりいふは實可喰米のれきある  
其物萬國不秀て美しく豊く精なりとてり



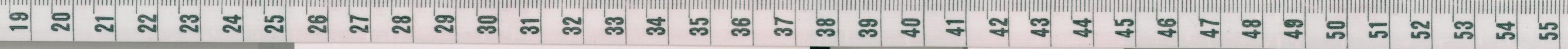


皇國ハ飯の味ハ酒を入味寄く嗜する甚一  
きんや也味寄味寄る支那人の徳人の人勝れり  
い上りもこの皇國の酒を飲めども不喫して酪  
可もいひきり安永天明のころ数年味寄る  
り程赤城ハ六歳はるより也味寄に遊び到て六  
十歳不及つれそ一度止つれ我邦の飯味味寄の  
物不堪うつて再びも渡来して生涯を過すと也  
美人とては唯香の味をかきて有つては喰到て  
を右のこし又蕙葉の僧笠庵といひり嶮巖此桂  
州と云僧不諳り也味寄唐山に在り時を平生獨參

を服用せし本邦亦未て味寄けは喫るべし  
獨參湯不用にちりり又此方味寄流人唐山  
に在りて味寄を製りて大富を得りりとい  
話とありり持して件不いりりとい

大皇國の平食を美ら事をといひり

大日本乃一号に細戈千足国オホヤマトと稱るホコ戈ヤ劍キの武道キは  
所是國の義を太古より今世に繪の如く  
用ゝれて武名を則ち道と唱へり細とハ  
玉といふと同意にて即ちを賞する辭なり故世は玉  
鉞といひて遂に道といひり





あり千足の千八例の借字にて即道行故大己貴命  
大社此 大日本國を造りたるを以て既大國主と  
又矛の道に長おはせむ八千矛神と御名を稱て天  
下を領するも此皇國を天孫奉へきなり  
なる退きし時大國主神曰我々此矛を以て  
國を治す必平安しむらん其廣矛授奉りて  
天下を治すに矛を以て行ふと明白故矛道皇國の  
大日本國ハ國うにて戈劍の鍛もよく神にて人心  
あく確を〜〜らん言さるる〜〜

天照大御神ハ女神は〜事と何と時を十握の劍  
九束のつるに八握の劍を取帶り背に千束の鞞五  
百箭の鞞を取負り臂にいほの高鞞をと著し  
弓腹うけつて〜向腹ふ〜法雲水を就  
散して稜威の男健う〜たよ〜教萬歳  
を行て人皇と〜せ給也

神功皇后に神勅あきて新羅國を言向はせむ  
弘安の度蒙古襲来て大戦しむ時神は言さ  
して敵船をくは〜又應永の度ハ玉躰を教し  
敵船不乗移りて軍兵三百余人御手つ〜海中



投入ぬまりしを於破りて異賊故北より又

建御名方大神ツケミナカタ方カタ諷フウを千人チヒトとて引ヒキきるス手テ末スエにキて

ぬまりしはほの御勇イサシなりぬれハ蒙古勢来し弘安の時

し雲クモをヒちちろチロめスこト何ナニもモ子コ我ガ志シてテ元元報報常常州州の

毗清縣ヒシヨウケンといふ地不該方大明神を勧請してちちろめ

に祭礼せらるるよしはるゆゑの大神と力競チカラして勝マつ

玲レイ建御雷神ツケミカミライジン饒ニギハヤヒちチの御事ミコトノコト申マウすはる

人皇と稱せらるるは此代この天皇をすめむ

臣ウヂにヒつツまマすス倭ヤマト魂タマのミ成ナリしキもモかカてテさサらラきキ

子コ我ガ賊セキなるものなりとてさし事コトはハてテなナらラむ



とく神の授ぬまり瑞穂の米を飽めて食て吾人を

アハレアハレニニヤカヤカ強ツヨクきてテ美ミ國クニおおししるる神カミのよぬぬまりまり

劔ツルギ刀ヤを取ト持チ人ヒトなりぬれを武術し固より万國お秀ヒる

とちとて終ハシつつといいせんん諺ことわざを二ははららせせていふ

欽明天皇の御宇膳臣巴提アヒテ便ヒを百海國ウミクニふふるるハハ巴アヒテ

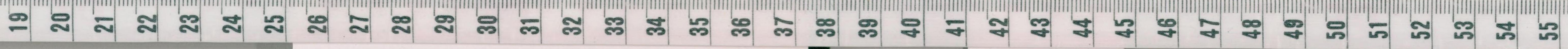
便ヒ從ヒるる子コを虎小コととりりに尋行タてテ虎トラの口中ノに左の手

みみを捕りテ女メを執て女の子を以て刺殺スしテ皮

を剥ヒ取リて家國ノに持つつるるよし一臺ダイ岐キ守シ宗ソウ行コウの臣とと

新羅國シンラにて虎トラを一矢ヤ不フ射セ倒タし又加カ友ユたたるる女メ赤アカ明アカの相鮮

めて虎トラを手討ツちてここのハ彼カ國クニ人ヒトととりりてこのハ





ひてを皇國の武勇をさへたはらうるのこゝろに彼  
地の人を虎あはせてをさへるこゝろにたあはれぬと弱  
しよわや又往昔 仁徳天皇の治代に上毛野君田  
道をきて蝦夷を撃除し時田道蝦夷に放て死す志  
こそ後より蝦夷起来て人民を累あ既彼田道墓より  
掘りてんとしり時田道大地不化て目を發瞋墓より  
出て則蝦夷を咋いし其毒を手に犯されしに死  
せて強者わつたに二人なる世多れ討死して  
君恩をわられも強勇の忠臣と申はるしをき世に  
支那風文字重なる儒者文人の我國の武士平常に  
く

けお事ある時を君の馬前よけて討死せしれ大  
死をの悦し君に忠はる道なきはかやうの嘲  
をけはなき深き論ある事人にいふに採りていと  
ん不護て聞へきこゝろに國の君たるは國を頼むは  
いとたぬ 天皇國の臣たるは國を並人撃し武  
内大臣たるはけしよる 皇大御國の事にかへは  
吳邦の人、唐の玄宗、禮義之國、神靈所扶  
と云元の世祖、知禮之國といひし、山海經大荒東經に  
君子之國と云へし、我國の事なり、後漢書に君子  
不死之國と云へし、多壽考至百餘歳と云へし、を





拙るに実万国不勝する米穀を喰て万国に多しを  
衣裳をもひて身文清浄を保つるに人も長壽なり  
て此まに万玉に揚れつるといふを故不死之國と云  
ふにちるをいふにこれをいふに所謂仁義禮智をい  
ふのつるをいふに神の國に美事といふに  
はるに非ざるや

神の与ふもよの劍の尊にことば  
神武天皇紀伊國に  
御合戦小負たまひしに天神よと靈劍を被授し依  
て大に利を得たまひしに大和國に幸て初國  
志りたりと云ふし又日本武尊ハ草薙乃神劍を

言して東夷を討給へりといふに世人の志るところに  
我邦の刀ハ吾國の靈なることハ歐陽氏ハ日本刀歌ハ白金  
傳入好事手佩服可以禳妖凶といひ諸葛元聲ハ倭刀  
を祈て可吹毛削鐵也といふ年海客不來といふ  
渴をせしといふといふに吾國に於ては吾國防禦ハ尊  
此劍不比されしと神功后皇の御心なるにやと云ふ  
東照神君みよと云ふに吾國に於て日本を攻んとす  
るの時を武内大臣九十九在て押ししは是劍の利を  
かてしその事ハ劍ハ切先のこの第一不吟味する子細  
は切先ハより鋭くして或は切り或は突き肝要に







はとすんを後我の米穀後の和四國の仲にて  
そねおまは言證を通りたもしも食物をささ  
まひをりて止まひ故争りつらんとしてか  
怒がよこせぬいさひに弟を欲せぬおまねん  
こころをせよおまを一人持たせてやると夫へいれ  
六へして船般よもちいれきとねんかよるた事れ  
はや越ぬ人ねんかよるた五斗おまねる米俵をい  
まのねんたに取立てき路を往來ひあり夫へいれ  
そまういは魂なとはむる命きたるや

天の鹿兒子天の真鹿兒矢ハ高天原にちりちりてまつ

神代より付へ来し稜威の神器にあらんやと云ふ此乃矢ハ  
身の守り國の衛りてくくちやましくぬれり威験有て  
武士み執持第一の物として既りりて武士の事をす取  
とすいさける是を子孫をたてて雲中の怪を  
ととと一教義相伝のこととすいさるわぬ時來り教政  
相伝のぬえ成射とありけハ世人のよくきねる可なり  
神功皇后三韓を平けおまひし後ハ本國より子矢ヲ尋く  
わつてやつて國の禦に備へれまるとして 欽明天皇  
の御宇と任那國よりこまつていさやう海表の國ハ甚  
子馬之ハあり故自古々いさるよてこれな 天皇ハ女





まはつて以て強敵を禦ぬるも天慈を以て多  
く予馬を以て是を思へ日本やうは予馬  
彼地を以て一人一馬を持て敵を  
禦んぬるも予馬に以て物やはる既 雄略天皇の御宇  
吉備尾代 勅を以て蝦夷五百人は引率て新羅国  
にむす時に 天皇崩御とすて変心 冠なる武尾代  
將軍予矢を執て五百人は不射死し予馬近くは應  
永年中日置正次舟置山戦の時内野において予矢は  
携敵を拒りに此矢のぬれ繁れざる者なり 時、矢既  
尽ぬれをせんうしむ堤下に隠れ居る者、敵を以て

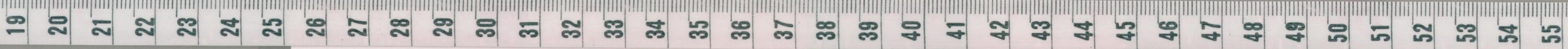
来るを以て立上りて聲を以て弦の打ちしり  
敵を以て逃去しり予馬を以て予馬は九者の理を以て  
可論ものに非はれん 仁徳天皇の御宇高麗國より  
皇國の予勢を以てんとすや鐵の盾と的を貢し、盾  
人の宿祢其盾と的を目前に以てきよく射ぬるに  
即高麗の客怕懼<sup>オチライキ</sup>て朝廷に拜し奉りし如き  
予に威験あるを以て予馬を以て予馬を以て  
いけや我神之大御國ハ八百萬神等八百万のもの  
予に執りて守りし予馬を以て予馬を以て  
八幡大御神ハ予矢の守護神とすし予馬を以て予馬を以て





とさくららに多ありとさくららに時を弘安四年蒙古襲来  
はく人救十万八千人なり其時 朝廷に諸社の  
奉幣使おらるるの祈祈やんとおらるるに 武道の  
尊神男山の八幡宮の靈験ハ鳴鐘の聲廟中よりして  
西にに向ておきし其時ふらしてきて子城の船覆て忽  
海は藻の養肥とわらぬまゝ同岐河等六段通有ハ海より  
見わたる小舟船進来ると其山蜀嶺のわらひとて大  
おの船は魁せん事成ちりて説の行くと此 大神は  
禱しは神のいよけ白雲とてし来りて櫓は鳥羽の  
征矢をくく持船船はくせん翔ゆりて一船はくせんぬ

賊ハ乞ふ天の雲つるはくるとて飲ふと浪行一時通有  
見やるとはくしれり 靈神の敵おは船を教いぬとて  
還る魚とて伯父伯耆守通時と傳ふ傳ふにお船  
に意揚り散らたに切まのさしと此 大神の武勇を  
てしきぬとたあはくや又 白河帝の時 帝は  
とこの御せを給 後ものにちるは道に  
これ義家御臣の悪ぬまの志う一往此地迄来りて  
はせもさしとて御年女とてせたましとも系御身  
の守護ともいぬるまはくせんといふはの語は  
吾とる人甲州身近に登りやとて隣の家に初生









事をもいぢけりまひてはかゝる容にもれずらん  
當今 主上賢明の 聖主にありては  
おはしましは 武術にわたりて  
大御身に侍りては 此に死なばは  
と年夫残わさるゝ所とぞ 勘慮おはす  
とれん爰も八月のころ七社奉幣使を  
とせ玉とては 先神事とては 古  
の事なれば 今も古も 玉とては  
此に死なばは 武術にわたりて  
字裁せし 悪徒の 勢にのりて 國を  
治むるに 功ありては 此に死なばは

いづれ 國にわたりて 用ゝるに  
らく米穀の 用ゝるに 大皇國  
とも 御用は 用ゝるに 折て 交易を  
小兒生育の 爲に 用ゝるに 此に  
勢を 用ゝるに 用ゝるに 用ゝるに  
前中納言 齋昭卿也 徳川家の 傳代  
アも 垂夫に 贈り 物等 ありて 決て  
れ 公途に 用ゝるに 用ゝるに 用ゝるに

或漂民を護送に 用ゝるに 用ゝるに 用ゝるに  
んとも 用ゝるに 用ゝるに 用ゝるに









形も色も

或人海軍經歷して鴨居村の漢夫とはを語すは  
是船定まり一々此代十七八町沖の方行くるの節、  
此海軍に諸家の固船をけしめ漢蟬の小舟まき  
懸わたりあつても凡三千艘も有つし東は高張の  
小挑灯を燈つし神其般小舟といふも五七の燧光は  
きはあつたりし故火事天を大く照光浪を  
やきてぞいさましぬといえぬなりはよるは是ま  
えてはしては美人も有りとは実つてもむと思  
はるるの故郷小妻子をちきてきぬ境ふたり

とはいつれも憂目をさへもんとおのこを戦  
ふも歎くはまを彼人う似る者なるをわめ  
るの漢夫といふく凡の侍を此代近も愚真を吹  
ちりしに聞てくよ捨てハ鼻を突ていと堪いしか  
けしよりけし故にあれ戦兵を喰つたにあるを  
薪ハ鯨の骨を用いたるの形ハ族中に死者を  
おねね不収て船底不積ちりしとたまひおれしや  
船中に赤大十匹をけしめ養ちりて妻人犯ひあり  
しははれしはけしハ剣類ちりしは友むつれ  
ちてあつてはるる有るなり





大猷公の時時甲斐庄喜左門殿長崎の奉行職を被  
仰付此時の公命曰日本の内にて御當家傳亡し  
他人天下を取て是ハ御一分の傳取をうけたり  
異国日本之地を一寸も其遣へて日本国の耻たの  
左候得ハ大切の事行ふに舟隨分油断あるまじき由  
件の公命を謹て申すに長崎奉行  
職にハ大役オホニヒシキあり侍りしやうに今年七月十七日  
長崎の沖小舟船より来て役々の人乗舟よりハ  
白木船ハ日本乃文字ありや國とまじ旗字  
船にてありし軍艦四艘入津して故黒田侯

鍋島侯を始て西國諸侯の傳國警衛船等例の如  
をうけたり是も亦國書を呈人といふを故  
追て傳書有て八月十九日西御番所より呈書  
御請取にたりしを御覽に敷笛字ありし  
五十九人上陸せしむして公邊を惶ていと穩な  
りしを傳へて其認をうけしカルルニヤ交易の  
こと成りしむるも我國ハこのてしるは御許  
なりしよりカルホルニヤに叶んとし先我ゆ  
し場へんて成固より彼ハ王國我ハ帝國なりしを  
王國ふちりてハ國賅ふ拘り世世の玉オモテマシ無面目





御賢察を希ふ所なり  
將此事件小弁てカルホニヤ若 貴国へ仇事し侍  
しは侍味方侍よりよりのよりにまゝにまゝにわたり  
世もよき疑りし表に西東ふりしをわたり若くは一味同  
意なきにわたりし説もあはれ或は滿州の地を  
攻取つれを隣国とわたりしは此ハ蝦夷地の境をわたり  
わたりて後來の争はれしを免れ且も隣國の好ま  
結らん為此使節もいふ説ありかゝるにわたりし  
くわたりしにせしむるにわたりし故十月の月あはれに  
發して長崎ふちのむせしむるありし侍

御勘定御奉行 川路左衛門尉殿  
大御目附格 筒井肥前守殿  
小十人御目附 荒尾土佐守殿  
御儒者 古河謹一郎殿

世の十五類をわたりしはわたりしはわたりしはわたりしは  
皇大義圖ハ千早振神代より外國に従ひしはわたりしは  
わたりしはわたりしはわたりしはわたりしはわたりしは  
外國を討つこと度り侍り其こと一夕の話つりしはわたりしは  
世ハ詳しきハ日記おひたしてあるはなほいふとわたりしは  
神功皇后三韓を討つるの事後新羅の人質給ふこと

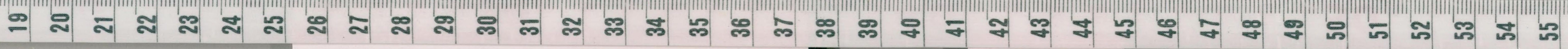




つてを遣へて新羅を攻めしむ  
時卓津城を拔きてしほの俘人を得しむ  
四十六年斯摩宿禰を卓津国につけて政務をと  
せしむしき四十七年の四月は新羅の貢使卓津  
の貢使と立に入貢し時新羅の方物の銭を卓津  
方物と卓津の貢に方物を新羅の方物として新羅の  
使のいづく若此事疑はるん日おいて汝等子  
殺むと卓津の使をちりてせしむ  
引けしよて千熊長彦をちりて其献物奪し  
を妻ししむ是を按ずる外国の賊意をき

故四十九年荒田別と鹿我別を將軍に任て卓  
津の使をちりてしむ 此時新羅を討破て比自妹南加  
羅。喙。安羅。多羅。卓津。加羅等七國を討平定し兵  
を移して西に廻り古美津に至り南蛮。沓。多礼。を屠  
てこれ百海にしむ時比利。辟中。布弥支。半古世。四  
ちのつて降服ぬ六十二年にも新羅不朝故襲津彦  
をちりて令撃ししむ

應神天皇三年百海王辰斯礼失しして紀角宿  
祢羽田矢代宿祢石川木菟宿祢をちりて其めやれし  
故百海国辰斯王を殺して謝之十四年



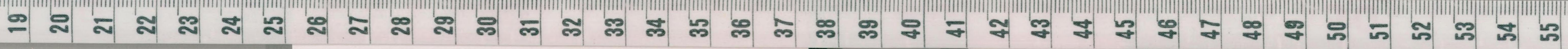


子月君百海よりのて養歸化の人夫百二十七縣を  
領て來るを新羅拒くたよきてこれ加羅国なるあり  
く作らるる故襲津彦をきりしは三年ありて  
あつひの爰小本菟宿禰的戸田宿禰を加羅につら  
て新羅を撃つとんとい時不其境不至小新羅王い  
くく愕て其罪不服とぬ故子月君の人夫を率て襲津  
彦もあつひ

仁徳天皇四十一年紀角宿禰をきりて始て百海の国郡壇  
場を分て具不御土のちの所を令録ありて于時百海の  
王孫失礼ことありて則鐵の鎖を以て其孫酒君を縛て

本國不迎つるを五十二年新羅不朝爰に上毛野君竹葉  
瀬をきて其故を令問ありて又其弟田道をきりて  
令撃つありしぬ此田道取百人を討て四邑の人民を虜  
にしてありしなり

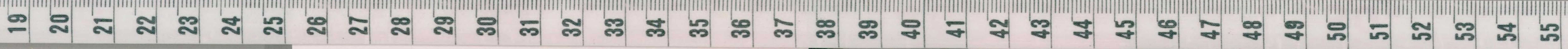
雄略天皇七年吉備臣田狹を任那国にきり政をさへ  
たよあ八年新羅任那の日本府小菽を請て高麗と戦ふ  
此取膳臣班鳩吉備臣小梨難波吉士赤目子等をきりて  
誉ありしなり 天皇即位より八年の間新羅背誕  
きて其物をきりてありし故 天皇御自身新羅を將伐  
とちのいしを神詔ありてありしは爰紀小子





宿祢蘇我韓子宿祢大伴談連小鹿火宿祢等々將軍と  
してまゝぬ於是小弓宿祢即新羅小弓を率て行々傍郡  
を屠ぬ故新羅王 皇軍の四面に鼓うつ音を聞て教百  
騎とてに乱れ走ぬわし追行てお戦ふはとに談連討死  
しとて小弓臣大伴津麻呂軍中に入て主君を尋覓け  
しとてくまのりくはハ声よあてて問ていしく吾主大伴きこハ  
何處小在といハ傍人告ていしく汝の主ハ敵の爲お討死  
き屍ハわしに在とをいふやいもや津磨踏叱ていしく  
主ハ既死とて何を以て獨りくんと爲とていよはりて  
復敵の軍中に走入てこゝに斬拂て討死せり此津磨ハ

いふきとて義士なりけりや武夫ハかゝるもいふもよし事也  
公和二十年高麗王年兵を發して百濟を盡せんとして  
倉下に聚とて兵糧既つきて夏あるといふに高麗  
王諸將ふとていふ百濟ハ日本国の官家なるてきて  
いれ 王よい入て 天皇小奉社とて四隣の赤小とて  
所行くとていふ遂に伐こして歩するらばを以てしむのい  
ふれ 大日本国の此威光萬里の境ふかやくとてかゝる  
こと 二十三年安致臣馬飼臣を率て高麗を討てぬ  
繼體天皇二十一年近江七野臣軍衆六万を率て任那小徒て  
新羅ふやめりて南加羅。喙已吞を任那小復合せん





とく

宣化天皇二年新羅任那小寇<sup>ナ</sup>たよとて大伴磐と狹手  
彦を<sup>ヒ</sup>け<sup>ハ</sup>任那を助んと<sup>ハ</sup>此時磐ハ筑紫<sup>ノ</sup>と<sup>ル</sup>ありて  
三韓不備<sup>ハ</sup>狹手彦<sup>ハ</sup>任那を鎮て百海を救ひぬ  
欽明天皇十五年百海<sup>ハ</sup>助軍を<sup>モ</sup>と<sup>シ</sup>て一千人馬百匹  
船四十隻<sup>ヲ</sup>十六年百海王餘昌王子惠を<sup>ヒ</sup>け<sup>テ</sup>去  
年父聖明王新羅の爲に殺<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>奏<sup>ス</sup>と<sup>ル</sup>不蘇  
我臣問訊<sup>ト</sup>い<sup>フ</sup>何の咎を以て茲禍あ<sup>リ</sup>や<sup>ト</sup>い<sup>フ</sup>何  
乃術を用て<sup>テ</sup>國家を鎮んとあ<sup>リ</sup>ハ惠報て<sup>テ</sup>い<sup>フ</sup>愚蒙<sup>ナ</sup>  
所て<sup>テ</sup>い<sup>フ</sup>大<sup>ニ</sup>計を<sup>シ</sup>況<sup>シ</sup>禍福の倚と<sup>ル</sup>國

家の存亡を<sup>シ</sup>ん<sup>カ</sup>蘇我臣のい<sup>ハ</sup>や<sup>リ</sup>昔  
雄略天皇の傳字に<sup>ハ</sup>國ハ高<sup>ニ</sup>通<sup>リ</sup>て危<sup>ク</sup>累<sup>ニ</sup>卵<sup>ノ</sup>  
よ<sup>ク</sup>甚<sup>ク</sup>い<sup>ハ</sup>作<sup>リ</sup>な<sup>リ</sup>天皇神祇伯<sup>ト</sup>勅<sup>シ</sup>て邦<sup>ヲ</sup>  
建<sup>テ</sup>神<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>請<sup>テ</sup>其神語の<sup>も</sup>た<sup>リ</sup>令<sup>テ</sup>救<sup>フ</sup>ま<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>は<sup>レ</sup>國家  
安<sup>ニ</sup>寧<sup>ニ</sup>な<sup>リ</sup>し<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>の<sup>に</sup>建<sup>テ</sup>邦<sup>シ</sup>神<sup>ト</sup>ハ天地割<sup>リ</sup>判<sup>シ</sup>之<sup>レ</sup>代  
草木言語<sup>シ</sup>時天<sup>より</sup>降<sup>ル</sup>來<sup>ル</sup>國家を造<sup>リ</sup>神<sup>ノ</sup>行<sup>リ</sup>頃<sup>ハ</sup>中<sup>ハ</sup>  
は<sup>レ</sup>女<sup>ノ</sup>國ハ神を不<sup>レ</sup>祀<sup>シ</sup>とい<sup>フ</sup>前<sup>ノ</sup>禍を<sup>テ</sup>悔<sup>ミ</sup>て神宮を<sup>テ</sup>修<sup>リ</sup>理<sup>ス</sup>  
神靈を奉<sup>テ</sup>祭<sup>ル</sup>ハ必<sup>ズ</sup>國ハ昌<sup>ニ</sup>盛<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ル</sup>とい<sup>フ</sup>は<sup>レ</sup>ま<sup>ニ</sup>て<sup>ハ</sup>  
皇國乃大道を<sup>シ</sup>る<sup>ニ</sup>さ<sup>レ</sup>た<sup>リ</sup>有<sup>ク</sup>さ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>き<sup>ニ</sup>五年  
聖明王任那の執事と日本府の執事を召<sup>シ</sup>時日本府





のつふ祭神をき時いれ正月元日をきして行て  
承ふとぞれを以てきと

孝徳天皇の紀尔祭鎮神祇然後應議政事と見  
之て古今此例のち行つる一年のけし正月八神を  
祭て然後小御政事を議せしむる故国家平  
安にせん神を祭つてを成らるるにを成りしむる  
ちばくはくも貴族此大道の古例をきりて心一  
統せんといは素戔とて十萬の勢を催し素戔と  
天神地祇の靈験もして阿るをきりて 同册七三年  
七月大將軍紀男磨河内瓊正をきりて新羅の任那を

攻一状をとけんとて大に新羅と戦ふも八月大將軍  
大伴連狭手彦数方の兵を領て高麗を破りて  
敏達天皇六年大別王と小黒吉士をきりて百海国を宰  
はせしむる

推古天皇八年境部臣を大將軍とて穗積臣を副將  
軍とて萬餘の軍兵を率て任那の爲に新羅を撃て五  
城を拔とて九年大伴連鬻を高麗にきり坂本臣糖  
手を百海にきり任那を令救しとて十年二月  
来目皇子聖徳太子  
之弟を大將とて新羅を令撃しとてはん  
とて軍衆二万五千人を授て四月筑紫にきりしむる



て皇子病ありて征討を果ししむるは  
齋明天皇四年起<sup>イナ</sup>国守阿部臣比羅夫<sup>ヒラフ</sup>肅慎<sup>シウジン</sup>を討ぬ  
六年阿部臣船軍二百艘率てよ肅慎を討ぬ同年十二月  
天皇御身つゝ筑紫に行幸しあまひ百濟のみな救の軍  
をせりて新羅を伐んとて船を造りしむるは  
七年七月此征を果ししむるは  
崩御ありぬ此時皇太子<sup>天皇</sup>もももに従ひしむるは  
天智天皇七月皇太子<sup>天智</sup>素服たらしむるは政をたらしむるは  
あまひ伊豫の長津宮へ遷りて前將軍阿曇比羅夫  
よりて百濟を救ふ兵仗五穀を送り玉ふ二年前將

軍上毛野稚子二万七千人を率て新羅を伐ぬ又八月  
新羅小おいて唐船師と戦へりて其後年々くして  
豊臣大閤の朝鮮を征伐せしむるは世人のまことと  
なりしむるは豊臣公以来いと殊なりと東照宮の公命  
よと對州侯彼国王に志をくしむるはたはいて奉附むる  
ももも皇国の猛威なりと薩州侯琉球を攻  
取てしむるは臣國なりと  
あは異国より我邦を攻めしむるは  
神功皇后の御時小阿部といふことをたしむるは  
孫權といひ奴を攻んとて数万の兵をわたりしむるは





とし武内大臣筑紫に在て政道を執りしに  
よして勝利ありしこと成はるる其軍兵竊小のりし  
とる共 東照宮の神書に在るはせしむるは水府  
卿まゝ一班抄小載りしに在る

桓武天皇の延暦六年に表兵襲来し

嵯峨天皇の弘仁二年新羅對馬小寇し

同四年新羅一百十人肥前国小近嶋小着船して土人と戦  
ころはる者あり捕りて者令てる一人なり

宇多天皇の寛平四年新羅来り六年二月あり来りぬ

ころはるに四月ありしに七万二千艘といふ九月對馬にあり

四十五艘よせしむるに時守文室善友郡司士卒をつとめて  
いくれはる者若箭背小立ハ軍法を以て將小科罪ん  
箭額小立ハ可賞之とて戦し善友三百二人射殺し  
一條天皇の長徳三年十月南蠻の賊大宰府の管内に乱  
入し伐獲し者三十餘人あり四年二月高藤の賊来りぬ  
九月あり南蛮来りぬいつはる大宰府に在る追伐し  
長保元年南蛮あり来り討れぬ  
後一條天皇寛仁三年刀伊の国賊五十餘艘壹岐島に来  
て戦ふ爰に守藤原理忠其軍をばく射殺して破りぬ  
四年南蛮の賊薩摩に来りぬ

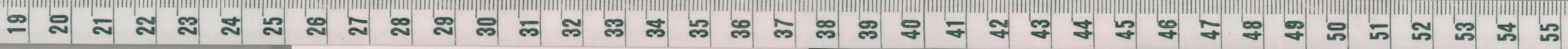


龜山天皇の文永五年後正月蒙古カク國并高麗の牒状は  
しめて来ぬ六年三月蒙古の使八人高麗の使四人従類七  
十四人對馬に著船以九月より重て牒状来りしこも返  
牒をもたず依て八年十月より牒状を待て良郷といひ使  
来り直に將軍家不可傳よりなり十一月十月昔蒙  
古の賊船對馬に著れ廿四日大宰府に至て官軍と戦て牧小  
牧と瀬東評定傳に又こもりてこれに歴代皇記に依て  
廿日の合戦といひ止しとる也 廿日大宰府三百  
餘艘の兵船を發して戦へば賊船二百餘艘宮崎の神  
八幡大神威力によらて忽漂倒して廿日吳城退船せしこ

後宇多天皇の建治元年四月元使長門の國の室津小来り  
て八月に至りて其牒使五人を鎌倉へ召下り九月七日竜口  
にきて刎首ひたりに弘安二年六月廿五日又牒状使をわ  
しつゝ此の博多において首を斬り此をとり四年  
七月蒙古の軍兵凡十萬八千人博多に寄来てお戦はれ  
晦日の末より國七月一日よりて神風いりて賊  
船こもり漂滅せしめて生てのこも者もつたに人ともや  
此神威カハ文永の度し有りて既にいひしやし

蒙古高麗寄来我朝時に追代

去月廿二日蒙古高麗引令兵船五百餘艘寄来對馬候









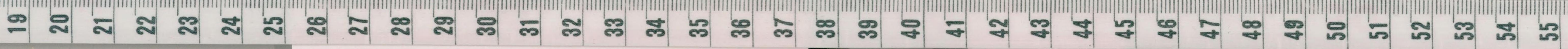
花園天皇の延慶二年三月一日吳国襲来魚きよりの飛  
脚いりしきりしとらきより正和三年五月もく神々吳戎  
に對して合戦あまのより鎮西よき鎌倉へ近つるに  
皇国に襲来魚きり賊徒を神の比上にて塞たものり  
ありありと云

後小松天皇の應永廿六年六月廿日蒙古の軍船一千三  
百餘艘對馬小寄来りて九国の軍兵戦いつたに廿六日  
神軍乃奇瑞ありて蒙古打負七月二日悉く退散し  
りしを記しに神軍の奇といふを左の比記をて  
しるし

九十八代崇光御孫百三代御花園院御父  
貞成親王

後崇光院御記云 應永廿六年六月廿五日

柳大唐蜂起事沙汰云々出雲大社震動流血云々又  
西宮荒夷宮震動又軍兵數十騎廣田社より出て東方  
行雲中ニ女躰武者一人如大将云々神人奉見之其後為狂  
氣云々自社家令注進伯二位<sup>資</sup>馳下尋実否云々吳国襲  
来瑞相勿論又廿四日夜八幡鳥居風不吹ニ顛倒若宮  
御前鳥居ニヤリヤリノ槍打碎云々室町殿<sup>持義</sup>御參籠  
時分也殊有御驚云々諸門跡諸寺御祈禱事云々廿五日  
聞ニ北野御靈西方を指て飛云々御殿御戸開云々諸社在  
吳驚入者也唐人襲来先陳舟一両艘已有合戦云々





大内若黨西人為大將海上行向退治其以前神軍有  
奇瑞之由注進云々七月廿日抑聞唐人襲來舟薩摩  
之地人合戰唐人若干被討國人七被伐云々唐人中有如  
魁形者以人力難責云々浮海上吳賊八万艘之由大内方  
注進到來自探題注進者未到云々兵庫、唐船一艘着岸  
是八為使節非軍船云々廿四日聞兵庫來唐船不可被入  
帝都云々牒狀之外四字ノ札歎之其文字云梵沐相重此  
字無讀人云々僧俗幸人不讀解難心得云々薩摩、舟  
吳賊蒙古云々八月十日抑唐人襲來去六月廿六日於對  
馬小戴大友菊地以下合戰吳賊打負若干被討大將軍

二人生捕云々大風吹唐船數多破損入海了允唐船二万  
五千艘云々生捕大將兵庫來去六日注進到來云々  
天下大慶室町殿御喜悅公武人々參賀鼓操 仙洞心  
同賀申云々昨日門跡執柄大臣以下大略參賀云々雖末代  
神慮之至不思議也抑吳國襲來事去六日探題注進不  
慮披見記

畏言上

抑六月廿日蒙古高麗一同ノ引合テ軍勢五百余艘對馬  
寫に押寄彼寫我打取之間我等大宰少貳勢許にて  
時日をいひし浦々泊りの舟着て日夜之間合戰を





致之間敵味方死し者其数をさす既難儀之間九  
ヶ国の軍勢找ね催同廿六日各手致しつた安否の合戦  
を致之間異国之軍兵三千七百余人打取斬棄るの外ハ  
数をさしつて敵の舟海上に浮物一千三百余艘なる  
海賊仰付し夜晝致限しつた合戦或ハ舟乗損し  
て海上に沉物甚多しつた合戦最中奇特神變不思  
議の事一篇行つた敵の舟において雨風震動す雷と  
るに霰降大寒手さして打物の柄にもつたを凍  
死しつた其限をさしつた就中奇瑞に合戦難儀の時  
さいつつともさす大船四艘錦の旗三流小差する

のち持たねおきハ女人形其力量るるさす蒙古  
舟に乗後て軍兵三百余人手取りて海中に投入小大将  
蒙古才其外以下咎の者廿八人少ハ即時小斬弃お残  
七人ハ上意によつておあつて廿七日午夜過つた是國  
の残兵とも皆引退蒙古打死と風聞は此説未定なり  
その外敵の舟とも七月二日悉退散仕ぬ如此急速に落居  
併神明の威力仍也上様の御運も殊目出畏入候委細  
猶畧して注進如件

七月十五日

九州探題  
一色兵部中輔 号北野一色  
探題持範

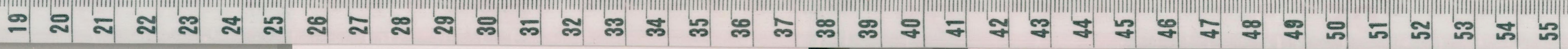
左の如く諸神威力を以て物さすし正説あるを世人





弘安の度の<sup>ニ</sup>きりて應永の此度の戦ふ<sup>ニ</sup>まわ<sup>レ</sup>く  
行<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>も<sup>レ</sup>これの<sup>ニ</sup>行<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>吳賊襲来<sup>テ</sup>大戦<sup>ス</sup>乃<sup>チ</sup>時  
必<sup>ズ</sup>も神威の輔<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>モ</sup>度<sup>ノ</sup>行<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ニ</sup>を今年  
吳國の軍船<sup>来<sup>リ</sup>て</sup>に<sup>つ</sup>き<sup>て</sup>も<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>不敬の人物<sup>有<sup>テ</sup></sup>  
私安の度の神風<sup>といふ</sup>も<sup>レ</sup>時の悪風<sup>にて</sup>信<sup>じ</sup>て<sup>モ</sup>嘲<sup>ひ</sup>  
て畏<sup>レ</sup>た神の御威<sup>光<sup>ニ</sup>なり</sup>て<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>る<sup>ニ</sup>も<sup>レ</sup>人面<sup>獸<sup>心</sup></sup>  
い<sup>ひ</sup>つ<sup>き</sup>行<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>既探<sup>題</sup>の注進<sup>状</sup>に大將<sup>ハ</sup>女人<sup>行<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup></sup>あ<sup>リ</sup>  
を伊勢<sup>國</sup>の度會<sup>郡</sup>に大宮<sup>柱</sup>太<sup>高</sup>敷<sup>テ</sup>高<sup>天</sup>原<sup>に</sup>天<sup>下</sup>  
を<sup>又</sup>ける<sup>ニ</sup>も<sup>レ</sup>撞<sup>賢</sup>木<sup>嚴</sup>之<sup>御</sup>免<sup>天</sup>疎<sup>向</sup>津<sup>媛</sup>命<sup>と</sup>  
と申<sup>大</sup>御<sup>神</sup>お<sup>る</sup>も<sup>レ</sup>け<sup>目</sup>あ<sup>る</sup>也<sup>之</sup>お<sup>神</sup>の御<sup>上</sup>

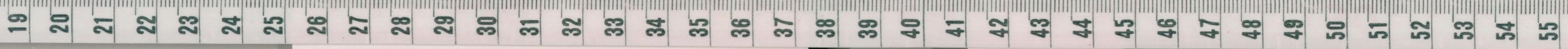
に<sup>し</sup>固<sup>乃</sup>大<sup>事</sup>を<sup>は</sup>る<sup>ニ</sup>御<sup>念</sup>多<sup>し</sup>ハ<sup>天</sup>地<sup>の</sup>け<sup>め</sup>  
よ<sup>も</sup>神<sup>の</sup>皇<sup>國</sup>と<sup>も</sup>稱<sup>る</sup>謂<sup>は</sup>る<sup>ニ</sup>也<sup>其</sup>御<sup>恩</sup>也<sup>と</sup>  
こ<sup>の</sup>ま<sup>に</sup>神<sup>ハ</sup>も<sup>た</sup>ぬ<sup>も</sup>や<sup>い</sup>ひ<sup>お</sup>る<sup>ハ</sup>の<sup>い</sup>ひ<sup>を</sup>  
も<sup>つ</sup>に<sup>い</sup>ひ<sup>を</sup>と<sup>ん</sup>ふ<sup>ハ</sup>史<sup>記</sup>に<sup>も</sup>也<sup>是</sup>皆<sup>神</sup>國<sup>之</sup>儀<sup>而</sup>  
敬<sup>信</sup>神<sup>明</sup>有<sup>勝</sup>於<sup>異</sup>邦<sup>矣</sup>と<sup>も</sup>さ<sup>る</sup>也<sup>實</sup>に<sup>我</sup>  
神<sup>國</sup>の<sup>吳</sup>邦<sup>ハ</sup>勝<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>は<sup>則</sup>吳<sup>邦</sup>の<sup>人</sup>に<sup>は</sup>あ<sup>リ</sup>  
さ<sup>ら</sup>に<sup>も</sup>其<sup>異</sup>邦<sup>ハ</sup>勝<sup>リ</sup>て<sup>あ</sup>る<sup>ニ</sup>は<sup>け</sup>れ<sup>ぬ</sup>也<sup>より</sup>  
一<sup>々</sup>に<sup>い</sup>ひ<sup>も</sup>て<sup>来</sup>る<sup>ニ</sup>所以<sup>ハ</sup>也<sup>又</sup>元<sup>和</sup>の<sup>け</sup>め<sup>に</sup>  
は<sup>も</sup>山<sup>田</sup>仁<sup>左</sup>門<sup>長</sup>正<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>人<sup>南</sup>天<sup>竺</sup>邏<sup>羅</sup>國<sup>ハ</sup>行<sup>テ</sup>  
王<sup>の</sup>女<sup>を</sup>娶<sup>テ</sup>諸<sup>侯</sup>を<sup>治</sup>る<sup>ニ</sup>も<sup>駿</sup>府<sup>の</sup>淺<sup>淵</sup>の<sup>神</sup>威<sup>を</sup>請<sup>テ</sup>





あはく軍功を得るに由りしを故其戦闘の状を繪  
らせ扁額と稱して暹羅よりも駿州の神前小献し  
て報賽し又 大府に宝物を献し其扁額の寫を  
近頃安中侯の御文詞にて小諸侯上梓せしむるを  
見てもちりつる 又寛永五年長崎人濱田弥兵衛、臺  
灣を薙せしも琉球国の中山王ハ鎮西為朝の末葉支那  
の清王ハ東越より出て判官義經の後胤なり其時  
聞も之れ勇烈のあまもちりつるや 皇国の美事なり  
すや 然るもいとも我國ハ于戈治るを袋に  
凡三百年にわたりし其賊ハ近く兵銃を用ひ練兵

れを誇りしを以て必謾るるを以てはしめても  
あはくはあんなや兵書に謾る者多利字失ひ  
者ハ不克よをいとも 至論なるを  
抑我國人の産育の巨多なるを世に校る国も  
郡も其明證をいとも 和菜院にて旅行家と  
いひて人を外国に長く其地小徘徊をせしめ  
風俗地理政教を視察しといふは、英國の輿地学者  
デコイグ子スといふ人の清国の民教を精く算して一マイル  
四方比内或六百四十四人或三百廿四人といふ平均一マイル内  
四百九十人なりし不乾て蘭人のいとも 清国に比し





我國を教倍ありて一マイルの内四千人をあげてたふはこ  
れを存し準し日本にて一マイルの地を按るに大畧二万人  
にあらずしマイルは我邦一里  
廿二丁にあらずに日本国中の人民を量るに  
定て廣莫れども此廣莫の人民力を合せ心を一連し  
せん時を假令萬国一統して仇れども何ぞ悲しむに  
るべきモトヨリ元來我國ハ 神の御国に有るハ 天神地祇  
いづれも威力を添はるべきならはよふべきものなき如し  
るに人を 神威を蒙り 神ハ人力を以てせんハ百戰百勝  
いづれもたれども是則ちほむべき  
上御一人をけめ奉りすべし誠忠をつとむるべき

るべきはかゝるも衆心一致の精意を貫く假令夷賊  
百万此船をよほしも銃氣國中に満ちりて退んこと  
烈風の案山子を吹ふ如し  
かゝる不虞乃御防禦に於ても米穀みのほむせりハ  
せんはる今年ハ教十年おほはる豊饒ありて万民鼓  
腹の樂をばりしうけしむるもあはむるこれぞ  
神威の輔とやいんこれぞ神慮の惠とや申はん如し感  
應の祥しあれハ此米を喰て精力をまし 此米を畜  
積て糧米の備とならむ万々の時いづれもはゆはるを  
憂もたゞく實に 神乃授ふまじ 瑞穂の国の称号し





明白イナシロの事と申さるるやいふ事多し

附

或人問てい〜 神功皇后三韓征伐の時彼国の王  
日本の大也と書せ給〜 或書云下総国關宿老臣木村  
正從語云林道春筆談小神功皇后三韓征伐御時彼  
王等の甚く懼慄オチラクキきてあまねく早く伏居マひ為體タを  
看行ミツハシて方陣を以て王の門なる石壁に韓国之王者大  
日本之大也と書せ給〜 其文字今猶遺存〜 と朝鮮人  
自ラ語ミよりを記せしむる事と見らるる事

此頃吾關宿一故ありて對馬人来て住み某云け〜  
わのれをやくハ朝鮮国番士して彼國に在き彼國の古ハ  
此王城の趾と云地不高き巖あり其絶壁に韓国之王者  
大日本之大也と云十字あり是昔神功皇后の方陣を以て  
書せ給ふ也と云付〜 其後其字を耻て削り取〜  
とせ〜 其度毎に人氣絶して立所小死多故小恙ハ畏〜  
て今も其事あるを余も正目小とて諺りぬ世者文才  
らるる俗物ハ何〜 造らざる事と云云〜 聞せ  
〜 或人云い〜 神の行ある事ハ何〜  
何やとていつて三韓ハ皇国の臣国なり 諺も天地と





其小遣に往くとおもひにころよにたしむる事  
又或人の問に違ふやうに江の 大御城小天下ありて  
ちよよの大御代とありて海内平安なりとあるに元和の  
匹夫の山田氏よりや吾国よしせよ渡ゆきて諸侯に礼  
ありといふはうに礼ひわて敬くことして疑まらざる  
はせてよといふた答なり夫れまゝ渡田のことも近きこと  
上板の海外異傳といふ書に詳くありとせしむる  
ちよよの事ありありありありありありありありありあり  
有つるにちよよと妻はつたにやとてて出する松

そよよとてぬるにちよよ

元和のけしきつて山田仁左衛門長正といひ人ありて  
或は伊勢人と或は尾張の人といひいふも自れ織田信長  
の孫と稱していふ事よく大志ありて世のいれに子  
なるも只武邊の心を以て腕立れよとありて  
流落して駿州府中に住めり其頃ハ天下治へばよ  
武家の仕官をいふものも皆諸侯あるを長正モリカズと  
せり今此地ありてハ功名を立てんことにはさし  
いて外国へ行て志をみんとおもひてさしシ當時トキ  
吾国不往来とていふ御制禁行くて既小駿府に



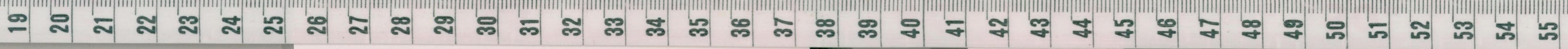






日本の流浪人彼地不<sub>レ</sub>マ<sub>レ</sub>ウ<sub>レ</sub>長正<sub>三</sub>これを暹羅の士に合て  
万余人の勢を得て皆旧国の風不<sub>レ</sub>装ひ日本より援兵大  
勢来<sub>レ</sub>ル<sub>レ</sub>と流言して六昆と戦<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>は勿論勝利ぬ爰  
に六昆王大<sub>レ</sub>憤<sub>レ</sub>國を傾け来て寇<sub>レ</sub>んと<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>  
其兵数十万ともて長正のい<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>敵多くしてを強<sub>ク</sub>  
ハ<sub>レ</sub>鋒を以て争<sub>コ</sub>ト<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>この<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>を用て撓めを付<sub>レ</sub>  
こ<sub>レ</sub>易<sub>コ</sub>ト<sub>レ</sub>とて軍出を<sub>レ</sub>フ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>存<sub>一</sub>を山陰不<sub>レ</sub>伏セ  
一<sub>レ</sub>を海峯の船不<sub>レ</sub>置て長正親其<sub>一</sub>をい<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>め<sub>レ</sub>海陸の<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>  
追<sub>レ</sub>みて挑戦<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>倭<sub>レ</sub>及ぬ敵<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>備<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>初<sub>レ</sub>追<sub>レ</sub>来  
こ<sub>レ</sub>急<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>爰<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>合<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>鉄砲<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>

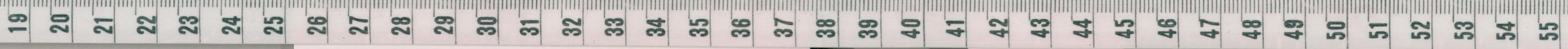
か<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>身を<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub>候<sub>レ</sub>海陸の二年<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>  
追<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>み<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>戦<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>長正其<sub>レ</sub>機<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>返  
して敵を中に獲<sub>レ</sub>前後よ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>烈<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>攻<sub>レ</sub>伐<sub>レ</sub>て敵兵数万  
人<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>北<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>追<sub>レ</sub>討<sub>レ</sub>て遂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>都<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>即<sub>レ</sub>六昆王  
を擒<sub>レ</sub>りて帰<sub>レ</sub>陳<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>威<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>振<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>四<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>此  
國<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>ゆ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>暹羅<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>徒<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>争<sub>レ</sub>来<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>  
こ<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>暹羅<sub>レ</sub>王大<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>賞<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>妻<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>  
六昆及<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>波<sub>レ</sub>苗<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>地<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>唵<sub>レ</sub>普<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>唵<sub>レ</sub>普<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>侯  
とい<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>ほ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>良<sub>レ</sub>ス<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>暹羅<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>既<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>老  
多<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>正<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>して<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>扱<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>唵<sub>レ</sub>普<sub>レ</sub>良





の名印度諸国にひきまはれ、本邦に遠く去りて知人外  
数年を終て歸來田二人あり、高のて免遣羅布到り、六  
はるかに使來りてと報告しつ故に、館にいとまはあは  
役人來りて國王目見をもち、あつて、二人を執り、  
あつて、館に、いとまはあは、王城に入行し、は、王冠服  
して、椅子にあは、金珠は、は、て、臣下並に、  
いとまはあは、二人下伏膝行あは、  
いとまはあは、て、環膳義味を、  
容をもて、  
をもち、  
をもち、

ぬ、二人あは、  
て、二人あは、  
や、二人あは、  
衆十を、  
礼多、  
は、二人あは、  
あつて、  
昔、  
勝利を、  
あつて、





贈献せしむるをわづらひしに事なきを

臺灣ハ支那の南東小ありて海中にあり元永五年

濱田弥兵衛の渡り往ししとき紅毛の頭を日本

甲螺小よりばり彼地不在て日本の高船を掠る事あり

なり抑州字を古に聞はるる。明の天啟初年海徴の人

顔振泉といひ奴の悪黨を集て此地ありて我邦の邊

民を招き其群を加へて日本甲螺と呼て一はの阿もこれ

字なり甲螺ハ頭かといふ事なり  
ま日本のお勇かりてなり其以前鄭芝龍国姓爺  
父なりもこれ

て我邦小来といひをもたす強勇の人なり彼顔振

泉組一居りし。振泉死して後ハ芝龍をももて甲

螺といひ此島を押領して有るを志した此人明將

の旗下と行きて閩中といひ地に移り行ぬれ我邦の

邊民代て甲螺と行り于時紅毛人此地の内を借請て

んとしして則年貢にハ鹿皮三万枚をいひて約束

て城郭を築ぬりて住ゆ。ほ。此地の人今役使ひ

し。この家来のいひて鹿はのいひてをもあつて日本の

商人印度小往来し。近海をともれを引て人を殺し

又荷物を掠取れをもたす。居り甲螺といひし。せん。

つ。つ。つ。長崎の人濱田弥兵衛適此地あり。つ。

島人各々この事なり。訴て報返さん事なり。つ。





らんに濱田んより承諾あり此人を勇にして謀り其  
弟小左門其子新蔵といふ謀略ありて之を殺し人か  
多くはひききり乃甲螺の黨二十人を率て故園に歸りて  
公邊に謝るべくしるる勢のより免れしむりかくて  
長崎の御代官末次平蔵といひりくまもよせて船を  
人教を身て兵衛ふよせり即其教百人を農ふ仕立  
兼芝をよけい鉄鑊をもつて臺灣の海にたどりて  
彼紅毛人より我々の日本の民なり當座の土地を  
荒地多くして人のけいけいして此地を移りて開墾せ  
すことを欲んとす事なるを聞きては役人のめり

紅毛も昔は信じて即哨船を以て圍て上陸せし  
はを人まねりて我々の船を捕りて決て好意  
ありしとて我々の従ひ来り人何れ大勢をいし  
濱田答ていへば君の船はかく疑はんといふ  
日本此處より日本を人といふは我々の小民といふ  
を七国より日本を人といふは我々の小民といふ  
兵と我々のやと何れを別役人船中を檢へた數十艘の  
服差のよにて第に耕作の具のみ行りては紅毛意を  
て上陸せしむる故濱田城に入らして紅毛にも  
うを端々此の民といふは我々のゆゑを教日を









さてはつてゐるに紅毛令を付して放砲を止せ  
又士卒に命じて軍船一艘を射り船二艘をよらばせ  
貨物を積こめぬと海田に命を授けし紅毛を反撃  
せむに邦ふれんとし紅毛のいも今此のまに  
民を我指揮せんぬと我を俱にゆるけし旧  
にゆるし我を我十二歳ふれし一子に父子の  
情けれしとわれいせん君を愛するに不承  
代て結まひたれぬと復てゆるしとてそま及  
難く教人愛し船を射りしを我に帰せし  
御奉行にこれの情を許し大府にも聞えし

はせしめて早く此書集りしとせんはし  
海田の勇名を下に響かす肥前侯やするわ  
て福を賜ふたに福を以てそのいも  
大日本人の英雄を記す

大正六年十一月





Handwritten text in cursive Japanese (sōsho) style, consisting of approximately 12 vertical columns of characters. The ink is light and the writing is somewhat faded.

21 24  
18 80





863  
4

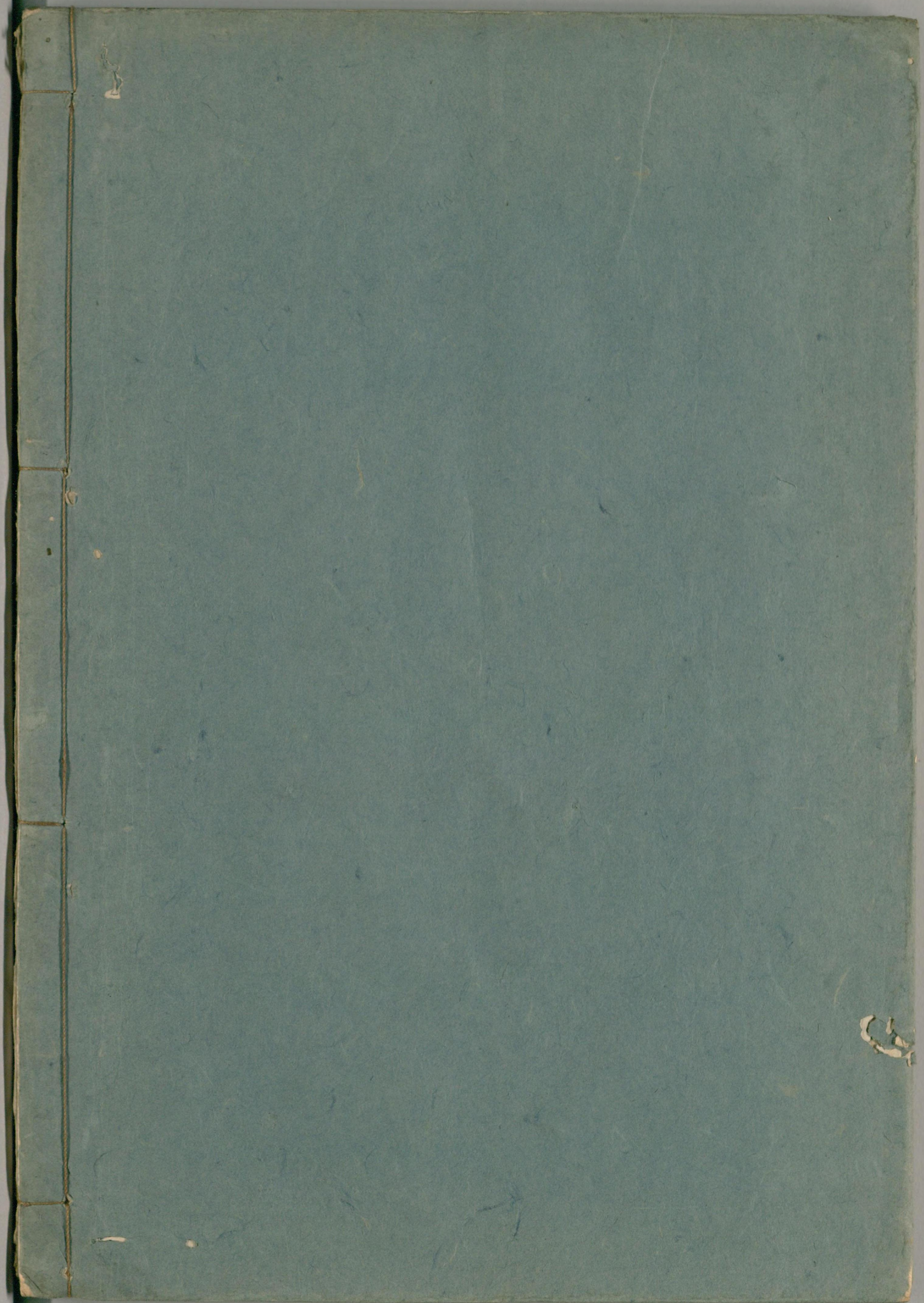
十  
ノ  
ノ



国立国会図書館 タイトル『皇園威談』 請求記号 863-4

ガラス使用





国立国会図書館 タイトル『皇園威談』 請求記号 863-4

ガラス使用